

あいさつ

エコチル調査福島ユニットセンター
センター長 橋本 浩一

コロナ禍におけるエコチル調査 ～開始以来10年を経過して～

日頃よりエコチル調査への御理解と御協力を厚く感謝申し上げます。

平成23年1月から開始されたエコチル調査は10年を経過し、11年目に入りました。福島県では現在でもなお、エコチル調査に参加した妊婦さんから出生した児の約94%にあたる約12,100人(令和3年5月現在)がこの調査に継続参加しています。当ユニットセンター(UC)は参加者、関係者の御理解と御協力のもと、東日本大震災の復興とともに歩んで参りました。令和3年度には参加されているお子さんの全員が小学生になり、1年生から4年生を対象に調査を進めています。令和2年度は、元年末に中国武漢に端を発した新型コロナウイルス感染症(COVID19)に世界が翻弄され、エコチル調査も対応に追われた1年でした。このような状況下で迎えた10年の節目として、リニューアルした令和2年度のエコチル調査福島UCの活動報告書をお送りします。

“対面調査への対応”

対面で実施している、学童期検査(全小学2年生、地域の公共施設)、医学的検査(無作為抽出した6歳児約600人、医療機関)においては、国、県、そして大学からの通知などを参考に感染状況を踏まえながら一時中止など適宜対応しました。また、対面調査の再開の際には地域保健、医療、教育関係者および協力医療機関関係者へご意見を伺い判断しました。さらに、日々の実施においては、大学病院の感染制御部の協力も得て、「新型コロナウイルス感染症対策マニュアル」を作成し、常に安全側に立ち調査を進めました。その結果、参加者へのアンケートでは多くの参加者から、感染症対策の取組に安心できた、協力して良かったとの評価をいただいています。

“新たな工夫”

「新たな生活様式」の中でも参加者とのコミュニケーション活動に努めました。オンラインでの環境セミナーの実施、“おうち時間”を少しでも楽しんでいただくため、福島UCオリジナルの動画を配信しました。

“成果の発信”

調査、研究である本出生コホート調査の目的は、確かなエビデンスを社会に還元することです。全国10万組の母子からのビッグデータによりエコチル調査関連の論文が数多く執筆されており、これまで全15ユニットセンターから発表された論文は和文、英文合わせて270通に及んでいます。福島UCでは令和2年度は学術ワーキンググループのメンバーが約20通の英語論文を執筆しました。当UCを含めエコチル調査からの発表論文は当UC、あるいは環境省のホームページからご覧いただけます。

“参加者からのおくりもの”

参加者の保護者の方から、子どもたちの手作りの菜と心温まる励ましのメッセージをいただきました。改めて、エコチル調査は参加者に支えられ歩んでいることを実感しました。

「スタッフの皆さまへ

姉と弟、二人で見つけた四つ葉のクローバーで作業しました。『みんながコロナに負けないようにパワーをあげたい』だそうです。』

本年は「うし年」です。「ねずみ年」に蒔いた種が芽を出して成長する時期とされ、一方で、結果につながる道をコツコツと作っていく基礎を積上げていく時期とされているようです。「黙々と目の前の自分の仕事をこなすことが将来の成功につながる」という思いの年です。ここ数年はコロナ禍の中での調査となりますが、今後とも、参加者側に立ち、「参加者の思い」を大切に、「やり続けたい」、「参加してきて良かった」と思っただけの調査となるよう、関係者の皆さまの御理解と御協力のもと一步一步あゆみ続けて行きたいと存じます。よろしくお祈りします。

令和3年6月